

森鷗外先生の追憶

與謝野 寛

私は森先生の御葬儀が済むと、張りつめて居た心が急に弛んだのか其夜から何かにつけて涙がこぼれてならない。こんな気分の中で先生に就て秩序立つたお話は出来相にない。それに先生の一生の業績は、萬事が専門化して一部面に偏した生活をしてゐる今日の人々には容易に想像の附かない程複雑してゐるから、先生の思想の推移を知るだけにでも、あの大部の著作を精細に讀返して見る必要がある。先生は何事にも半吞半吐の軽佻な態度を嫌つて、能ふ限りの徹底を求めなければ止まなかつた人である、それを思ふと今俄かに先生の批評をする事は私としては慎みたい。茲には唯だ、先生も寛假して下さるであらうと思ふ範圍に於て、順序も無く、少しばかり先生のお噂をするに過ぎない。

先生はこの三十年間一日も休まずに日記をつけてゐられた。簡便のために漢文で書かれ、それが本年の六月二十九日で断えてゐる。どうしてさう云ふ暇があつたか。日記は私なども少年時代に試みた経験があるが、大抵誰でもさう幾十年と續くもので無い。先生の精力の絶倫

と且つ用意の細密な事とは、此一事で萬事を推すに十分である。先生は近頃、死後に他人の手で間違つた傳記を書かれるより、自分で書いて置くに云つて、この日記を基礎に或人を助手として、自傳の筆を執つてゐられたが、遺憾ながら完成しなかつた。

先生の家は世々石見國津和野藩の醫官で、家學は儒である。少年時代からの同學として無二の親友である賀古博士のお話によると、先生は十三歳頃までに代表的な漢書を一通り讀み終り、頻に漢文漢詩を作られた。十六歳で大學豫備門に入り獨逸語と醫學とを修められるまでは、親戚の西周の家塾に預けられて漢學を専攻されて居た。先生の教育は家の儒に出發してゐるが、日本文學は家庭に於る母上の感化に本づく所が多い。近年まで生きてゐられた母上は非常な賢婦人で、江戸時代の小説や演劇其他の文學的讀物は、母上が先づ其節を話して聞かされると云ふ風であつた。後年、多くの青年文人が先生のお宅に集るのを、先生よりも寧ろ母上が非常に喜んで迎へられ、「めざまし草」の合評會の席上などでも、母上が新刊の小説其他を大抵先きに讀んでゐられるので、先生初め集つた者が母上から其の一々の筋を聴くやうな事

が屢々あつた。この母上の薫育が、先生、故三木竹二氏、小金井喜美子夫人、森潤三郎氏等の諸兄弟を、揃ひも揃つて讀書人、趣味人たらしめるのに大に與つて力あつたに違ひない。先生の令嗣で獨逸に留學中の於菟さんもまた「山君」と云ふ雅號で、八九歳の時既に「萬年草」に翻譯を書かれ、醫學士、理學士を兼ねて、歸朝後は帝大で解剖學の教授を擔任される筈だ相であるが、要するに篤學と聰慧とは先生の家系の遺傳的特質である。

二十歳で大學を卒業し、陸軍省の留學生として二十一歳から二十五歳まで獨逸にゐられた先生は、ライプツヒでホフマンに、ドレスデンでロオトに、ミュンヘンでバッテンコオフェルに、ベルリンでコッホにと云ふ風に、一流の新しい大家に就て醫學と衛生學とを學ばれたが之が後に日本の軍事衛生に先生が幾多の改善を加へて偉大な貢獻をされた所の根柢となつた。この方面の功績は軍事當局者以外に廣く知られて居ないが、先生の全體を知らうとする者は、必ず此方面の研究を閑却してはならない。軍事衛生の漸次の改善は近年に至るまで悉く先生の立案工夫に成らないものは無い。此方面に就て先生の筆になるものが陸軍省に多く遺されてゐると云ふ事だ。

獨逸留學中の先生は、晝と宵とは右の醫學に没頭し、午後十時を過ぎてから數時間を哲學と藝術との書物を讀むことに用ゐられた。先生の二時間乃至三時間睡眠は少年の日のからの習慣で最近まで續いた。徹夜される事も若い時は珍しく無かつた。之によつて毫も疲勞の色を示されるやうな體質の人でも、弱志の人でも無かつた。人は先生の少眠を傳へ聞いて驚くが、先生の行蹟は一々私達の驚くこと計りで、睡眠時間

の如きは寧ろ先生に於ては些事に過ぎない。先生が哲學と藝術との研究は獨逸以來一生を通じて繼續し、之が我國に於る美學の最初の論說ともなり、幾多の翻譯ともなり、浩漭な文學的作品ともなつたのであるが、茲に一つ世人のまだ知らない事で、而も先生の思想を知るのに必要な事がある。獨逸留學中の先生は猶外に政治經濟方面の研究に力を用ゐられ、後の謂ゆる社會政策に關して少からず修養する所があつた。社會黨の演説會などにも頻に出入され、彼國の政治學者とも交られた。其等の人々の間で「此次に來る日本公使は君だらう」と云ふ者さへあつた。此事は先生の處女作小説「文づかひ」の中でも一寸仄めかされてゐるが、先生を偉大なる軍醫、學者、文人としてののみ考へてはならない。かう云ふ方面にも敏捷な注意を怠られなかつた事は生涯を通じて續いてゐた。

歸朝されて幾年かの後、星亨がまだ洋行歸り早々で政治論を新聞に書いた。それが甚しく膚淺なものであつた。啓蒙のために種々の論戰を敢てされた青年時代の先生は星亨の議論を讀んで看過するに忍びなかつた。先生の駁論が新聞に出た。星亨が之に答へるに及んで先生の反駁は漸く鋭鋒を示し、二たび三たびの論争に、先生の論陣は周密と辛辣とを極めて、星亨は答ふる所を知らなかつた。黨人某氏が星亨の政治的生涯のスタートに禍すること恐れて、先生を訪うて乞ふ所があつたので、先生は其筆を收めて仕舞はれたやうな事があつた。

先生がかう云ふ隠れた方面の思想にも断えず新知識の持主であつた事の一例として、私の驚いたのは、今日までは云はなかつたがもう云つても可いであらう、明治の末年に大逆事件と云ふ不祥な事件が起つ

た時、法廷に立つた幾十人の辯護士は、誰一人、社会主義と無政府主義との差別さへも知らなかつたが、唯一人、雑誌「スバル」の同人であつた平出修君の辯論が其點に立派な理解を持ってゐて、關係辯護人の花井博士を敬服させたのみならず、被告の中の教育ある數氏をして「平出君のあの辯護があつた以上、死んでも遺憾がない」と云つて感泣せしめた。平出君は非常に名譽を施したが、其實、平出君の知識は全く森先生の知識であつた。熱心な新思想の憧憬者である平出君は、進んでこの辯護を引受けたが、社会主義と無政府主義とに關する正確な知識をどの學者かに由つて至急に聴きたいと私に相談したから、私は平出君を先生のお宅へ同行して密かに其事を願つた。すると先生は書庫から澤山の洋書を取り出して來られた。社会主義と無政府主義とに關する新舊の代表的な書物が悉く集つてゐて、先生は早く其等を讀破されて居たのであつた。平出君と私とは三晩四晩に亘つて深更まで先生の話を承つた。先生は書物の外に、露西亞、伊太利、獨逸、佛蘭西、葡萄牙等に亘つて、兩主義者の最近の運動を細かに話されるのであつた。

先生はかう云ふ風に、大抵の思想上、藝術上の新知識は、断えず讀まれる獨佛の書物と新聞雜誌とで素早く知つて、必ず其れに自分が見解を附し、底の底を極めて置かなければ氣が濟まなかつたらしい。さうして、其内の忌諱すべきものは、信頼すべき少數者の外には決して語られなかつた。

最近の十年、軍醫總監の現役を退かれる前後から、一方に幾つかの人物傳を書き、また博物館や圖書寮の公務に精勵しながら、断えず海外の新書に由つて研究せられて居たのは社会組織に關する思想であつ

た。眞劍に日本人の將來を憂慮せられた先生は、社会政策の實際方面に就ても非常な熱意を持つてゐられた。近年先生に親炙する或少數の者は、藝術談よりも、サンヂカリズムやボルセキズムの可なり突込んだお話の方を多く拜聴するのであつた。去年の或日「世間でいろいろと新しい其方の事を書く専門家が有るが、その専門家が私ほど其方の書物を読んで居ないのだから困る。相變らず孫引きでね」と云つて、られるのを聞いたが、先生は何につけてもこの孫引きが大嫌ひで「未書を讀むな、本の物を讀むことだ」とよく云はれた。

去年の十一月から、先生を中心として永井荷風、木下杢太郎、北原白秋、吉井勇、石井柏亭、高村光太郎、平野萬里諸君と私達夫婦とが雑誌「明星」を復興することになつた。一體に先生は雑誌が好きで、青年の時から幾つかの雑誌を主宰して出されたが、スバルを大正二年に廢刊してから久しく先生を繞る若い者の同人雑誌が無くなつて居た。それで今一度雑誌を出さうと云ふ事は大正六年來の懸案で、之がため度々先生の觀潮樓へ集つて相談をしたものであつた。物質的の事情で漸く去年の冬に創刊號を出すことになつたが、先生は毎號「古い手帳から」と云ふ評論を殘せられる月まで連載された。之はプラトンよりマルクス以後現代に至るまでの思想を批評される豫定であつたが、中世の思想にも及ばないで断絶したのは非常に惜しい。之は勿論この十年間の研究の成果で、由つて以て先生の哲學を窺ふべき何よりの述作であつた。

一方に圖書寮で「帝諡考」や「元號考」の著述のために、この兩三年間に幾千卷の和漢の古書を参照しながら、一方には「古い手帳から」のために多くの新しい船舶の書を読まれたのである。先生は「古い手帳から」で出来る限り簡潔で充實した精品玉の文體を示されたが、他人が若し之の註解を書くなら改めて百卷の書物を読まねばなるまい。この最後の新研究に「古い手帳から」と題せられたのは、遙に獨逸留學時代の此方面の研究に照應されたのであつた。

新刊紹介

◎船百合小百合 (葛原國著) 色の白くなる頃、二つの靴音等十四篇の少女小説を輯めたものである。何れも純な明るい、伸々とした理想の少女の生活を描かうとした著者の企ての成功したものである。女學生に薦めて情探陶冶の資たるべき穩健なる讀物である。(定價壹圓七拾錢 洛陽堂)

◎共生の旗 (白鳥省吾著) 詩六十六篇と散文詩八篇とを輯めた著者の第六回目の詩集である。著者は夙に民主主義の詩人としてホイットマンの祖述者としてその自由に眞摯に民主精神の主旨に努むる詩風はこの一巻によく現はれてゐる。最近詩壇の好著である。(定價壹圓三拾錢 新潮社)

◎作文學の方考へ方と作り方 (塚本哲三著) 前後五年間雑誌「考へ方」を通じて世の學生受驗生の作文に接しつゝある著者の苦心の述作、著者は文學の藤森氏と相並び、その國語に關する受驗法の研究は、全國受驗生に絶大の信用を博して居る人である。(定價壹圓三拾錢 神田錦町 考へ方研究社)

◎人格主義の社會觀 (一條忠衛著) 著者は一切の傳統、學問等を超越して自由の境涯にある篤學者である。この書は倫理學上に於ける人格主義を提擧して、現代思潮の進路に明示を與へようとして企てたもので、現代社會の缺陷と罪惡とは、資本に由來するもので無く、又労働に原因するものでなく、それを運用する現代の人類の觀念が幼稚なる結果であることを慨して著作したものが本書である。勞資徒らに血まみれになつて争闘するより、この書の如き立場に立つて冷静に反省することもまた有用なことである。(定價貳圓 大同館)

◎商學研究 (第二卷第一號) 商科大學内商學研究

編輯所編)本號には、福田博士の「勞農露國の「開國」と「資本主義降伏」伏令と本問法學士の一婦人問題と私法上に於ける妻の地位」松村商學士の一經濟學に於ける經營概念の方法的的研究」平木商學士の「ウエツア夫妻の改造組織」其他數篇を輯録してある。各學界夫々の専門雜誌を有して居るにしても、本誌の如く苦心の研究を、而かも多量に盛りたる専門研究雜誌は少ない。三七八頁凡て敬讀すべき研究のみである。(定價貳圓 大同館)

◎天日の仰いで (志垣寛著) 前者「弱きもの」の上に接続すべきもの、程程にいましめられたやうな師範生の生活の中に、戀を得、その戀人に捨てられ、更に戀を得て更に捨てられ、それによつて自らその生活に深刻味と複雑味を加へて行く一青年の尊き生活記録として若き教育者に必讀をすすめ、著者の筆は前篇に比して一層冴えたやうである。(定價貳圓 大同館)

◎社會遺傳 (大日本文明協會) 世界的著名の著述であり文明批評家である英のベンジャミン・キップの「力の科學」を譯述したるもの、西洋文明は今や或は暗黒期に入らんとして居るが、それはすべての状態が調和、普遍、統一、融和に向はしめて、反目、嫉視、疎離、不和、破壊、對抗の態度を取つて居るからであるからと斷じ、その觀察の下に論を進めたるもの、同様の愛は最も如實に我國の社會にも現出して居る際、この書の紹介は最も時を得たものである。内容は西洋知識の挫折、世界的革命の集積、大逆轉の心的中心等凡て十章より成る。譯文は暢達。(非賣 同協會刊行書)

◎新興文化と法律 (中央法律新報社編) 末弘博士、吉野博士、穂積博士、草野學士の意見學說等、すべて新文明の勃興、建設の盛なる今日、法律をしてその社會的意義を發揚せしめんとする企圖より編述されたもの、皆新鮮味に満ちた研究乃至意見である。(定價六拾錢 神田紅梅町二二 同人社)

◎カムチャツカ (黒田乙吉著) 大阪毎日新聞記者たる著者の旅行記觀察記である。カムチャツカに關する紹介者として最も要を得たもの、文章は簡潔で氣持がよい。(定價七拾五錢 大阪毎日、東京日日新聞社)

◎グラッドストーン (永井柳太郎著) 「政治史は人類の歴史の最も不道德なるもの」であるとしてグラッドストーンはその史論に喝破したが、そのことはたまに彼れがその不道德なる空氣の中に棲息し乍ら、よくその濁りに染まなかつたことを不用意の間にも自證せるものと言ふべきである。本書は彼れの生涯の重要頁を占むる政治家としての生活を叙したるもの、生立ち、少壯代議士、保守黨より出て、自由主義政治家、大宰相、復活せる老雄、第三次及び第四次内閣時代、隱退後、の各章に亘つて評述論述すること精細、今や青年にして政治を論ずるものに減じつゝある時、この書の出現は喜ぶべきことである。又著者その人をも得たことを多とする。(定價參圓 實業之日本社)

◎わたり鳥日記 (林學博士上原敬二著) すらすらと、ほんとに旅行記らしい旅行記である。アメリカの火事を説き、海水浴を説くかと思へば、十仙均一店を素見し、電話と電話學に氣觸を擧げ、大きくミシシッピ河を廻るかと思へば、優しく寫眞熱を説く。世界一の巨樹をコイアの森林に種々その専門の學識を披露するかと思へば、巴里の街頭に佛人の説を觀察して、一流の奇抜な批評を下すところ、世界を股にかけて廣く、精しく、素人玄人に一人に似たやうな、自由な筆を揮ふところ、まことに、夏向きの讀物として、坐して見るに、旅して見るに、よい書である。(定價貳圓 龜町區山元町一ノ三 新光社)